

検証 崩拓銀

<4> 10.10.22

旭川工業高校を卒業後、地崎工業に入社。二十四歳だった七一年に同社を辞め、「スコップ六丁と従業員二人」でカプトの前身、兜建設を設立する。

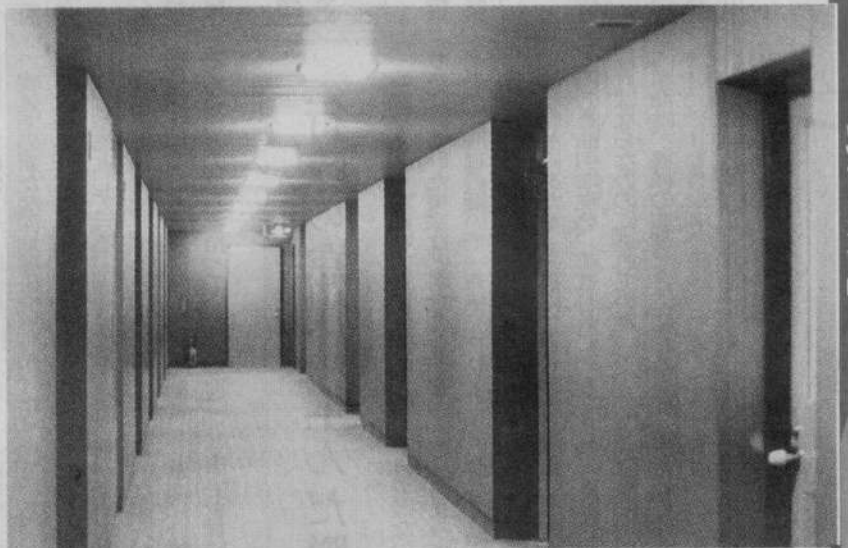
そして十年、兜建設は札幌市内で創業十周年記念パーティーを開く。そこで佐藤はヨレヨレの背広姿の現場作業員数人を壇上に上げ、「彼らこそ会社の危機の際にも見捨てず、支えてくれた功労者」とたたえた。作業員は涙を流し、参加者ももらい泣きした。

その中には拓銀の石黒もいた。これが後に北一条倶楽部での会食につながる。人心をつかむ人情家の側面

一つの卵

「若い、腹の据わっていない人物です」。拓銀の石黒直の運命が交差した。空知管内沼田町の深い山中に招いた三十八歳の若手経営者を同僚の佐藤安彦常務に紹介した。一九八四年秋。札幌市内の拓銀のゲストハウス北一条倶楽部でのことだ。「私には力も金もないが、将来は拓銀にメインになって最盛期人口二千人ほどの炭坑を振るう熱弁に、二人の拓銀マンは圧倒された。「一やってみるか、その時、おとなしくて目立たなかった」と、中学時代の同級生は、

「風雲児」「異端児」とに、経営者・佐藤茂の武器と称される激しい野心とともに



奥の廊下

激しい出世競争をくり返す。そんな時に拓銀との出会いがあった。田の大事業になった。八〇年代半ば、中村の店を「ヤオハン」進出をにらみながら周辺農地の「取得」に向かっていたところだ。「一けて動く。その膨大な費用も生懸命やっていたらね」。

中村は中村の評判を聞き、人物を見極めようとやっき業家へと変身した。当時、中村は多店舗展開など積極的な経営方針をめぐり、

「を哲学に、精力的な多店舗展開に乗り出す。そんな時五十億円の予定が二百六十億に拓銀との出会いがあった。田の大事業になった。八〇年代半ば、中村の店を「ヤオハン」進出をにらみながら周辺農地の「取得」に向かっていたところだ。「一けて動く。その膨大な費用も生懸命やっていたらね」。拓銀グループがねん出した。石黒は中村の評判を聞き、人物を見極めようとやっき業家へと変身した。当時、中村は多店舗展開など積極的な経営方針をめぐり、一枚の写真がある。撮影日は九三年六月九日。佐藤茂が洞爺湖畔に建てたリゾート「エイベックス」の開業記念式典でのスナップだ。中央に佐藤茂、右には中村揚一、そして左にはかつて拓銀インキメーカー路線の責任者だった海道弘司が、いずれもこやかに笑っている。だが、この写真の直後、拓銀は佐藤茂を手形偽造容疑で札幌地検に刑事告発。中村もテルメの事業から強引に切り離されていく。

捨てられた起業者

佐藤茂とともに、拓銀のインキキューバー(ふ卵器)のけるだけの商売はしたくない。九一年には隣接地でリゾート

初六十億円の予定。敬称略、同書は当時(拓銀問題取材班)

卵はあつさり捨てられた。